新潟市教育相談センターだより

もえぎ

第 110 号
令和３年１月20日
新潟市教育相談センター
新潟市中央区西大畑町458番地1
TEL（025）222－8600（代表）
FAX（025）222－8303
E-mail:sodan.ed@city.niigata.lg.jp

ちょっと、振り返ってみませんか？

所長補佐　桑　原　通　泰

５年ほど前，仕事で疲れて帰宅した玄関に１通の手紙が届いていました。何重にも折られた封書の中に書かれていたのは…
「あなたに適合する人が見つかりました。」

以前，何気なく立ち寄った万代の献血ルームで骨髄バンクへの登録ができると知り，勧められるがままに登録をしました。すっかり忘れていたある日，それは突然やってきました。

その後，医師やコーディネーターと面談を繰り返し，何度も検査をしました。最終的に同意書にサインをすると骨髄を提供する相手の情報を３つだけ教えてもらえます。年代，性別，住んでいる地域。私のお相手は20代の九州地方に住む男性でした。

私にも20代の息子がいます。もしかしたら結婚して，お子さんがいらっしゃるのかもしれません。今，この時を親は，子は，家族は何を思い，何を願い，どんな会話をしているのだろうと考えました。

サッカーの早川選手や水泳の池江選手がそうであったように，だれにも負けない強靭な精神力と体力をもち，トップアスリートとして活躍していてもその病魔は容赦しません。池江選手のお祖母様のコメントが今も忘れられません。「水泳なんてやんなくていいから，とにかく長生きして，私より先に逝っちゃうなんて，いやだから，とにかく長生きしてほしいです。生きてさえいれば，私は…。生きていてください。私が死ぬ前に死んでほしくない。」

もしかしたら私は遠くにいる，決して会うことのない誰かをちょっとだけ笑顔にできるのかもしれないと思いました。全身麻酔の眠りに落ちる直前，会うことのない誰かの笑顔に一瞬，会えたような気がしました。

這えば立て，立てば歩めの親心…でも，往々にして親は歩めば走れ，走ればもっと速く，高くと願うものです。

ちょっと，振り返ってみませんか？

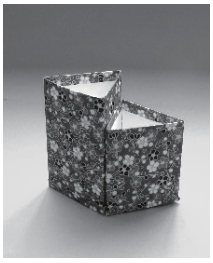
元気で生まれてくれさえすれば何もいらないと願ったあの日。初めて聞く産声に，自分の小指を握りしめる小さな小さな手に，声にならないありがとうを何度も心の中で叫んだあの日。時の流れの中で忘れかけているあの日の感動を今，改めて伝えてみませんか？生まれてきてくれてありがとう。元気でいてくれてありがとう。

時に，その小さな願いさえも叶わぬことがあることもまた，忘れずにいたいものです。

時折，空いっぱいに広がる青空を見ると，この空のつながる九州のどこかにいるであろう，ちょっとだけ関わった青年の笑顔を想像してみたりします。そして，自分も頑張ろうと立ち上がるのです。

令和２年度　作品展のお知らせ

日　　時：令和３年１月29日（金）
会　　場：新潟市教育相談センター
作品展示：10：00～14：10
音楽発表Ⅰ：10：30～10：45
物品販売Ⅰ：10：50～11：40
音楽発表Ⅱ：13：00～13：15
物品販売Ⅱ：13：20～14：10



小物入れと和本

感染拡大防止のため内容を変更し，午前と午後の開催となります。
３密を避けるため，事前の申込みをお願いします。

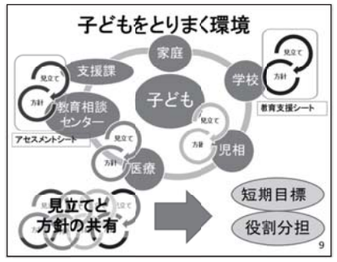
令和２年度　教育相談研究会

〈研究主題〉「今，求められている子どもへの支援」 ～子どもの自立につなげる確かな連携～

※令和２年度教育相談研究会を，11月25日（水）に当センターにおいて開催し，多くの教職員や関係機関職員の方々に参加いただきました※

＜第１分科会・教育相談＞

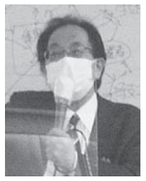
指導者 新潟青陵大学大学院 教授　**佐藤　亨** 様



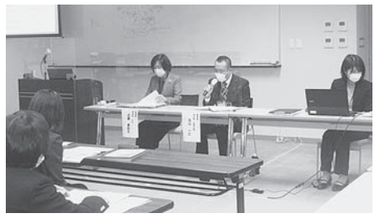
第１分科会（教育相談）では，研究副題にかかわり，新潟青陵大学の佐藤 亨先生から，「子どもに対する支援と連携」についてご講演いただきました。「連携の大切さが強調されているのはなぜか」という問いかけから，子どもの不適応状態を考える時，生物心理社会的モデルで多角的な要因が関連し合っているという視点で見立てる必要があること，さまざまな機関が有機的に連携して支援することがより大きな効果を上げる鍵になることをご教示いただきました。そして，機能的な連携のポイントを具体的にお話しいただきました。

教育相談部では，今年度，副題「子どもの自立につなげる確かな連携」を「それぞれの環境資源と見立てをすり合わせて有機的に支援する関係」と捉え，取組を発表しました。

子どもの不適応状態は，もとの原因が周りの環境によって増幅されたものがほとんどです。子どもの環境資源は，教育，福祉，医療など様々ですが，それぞれの立場で拠って立つ法や役割があります。そのため，連携には，尊重し合う姿勢がベースにあることが何よりも重要です。互いに顔が見える関係を築くために①ケース会議を開き，連携グループを形成する。②お互いの見立てをすり合わせ連携グループとして見立てを立てる。③具体的な短期目標を立て役割分担をする。こうした有機的な連携を繰り返すことによって子どもが変容していくことについて，具体的な事例をもとに説明させていただきました。



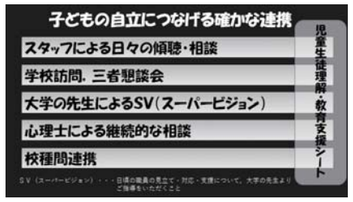
佐藤 亨先生のご指導では，学校におけるアプローチの特徴として「本人を取り巻く集団」について意識する必要があることや，見立てはスクラップアンドビルドであり，常にＰＤＣＡサイクルで考えていく姿勢が大切であることをご示唆いただき，参会の皆様も大きく納得されていました。



今後も，教育相談部では，相談者に寄り添った効果的な支援ができるよう，学校をはじめとした関係機関と有機的な連携を図っていきたいと思っています。

＜第２分科会・適応指導教室＞

指導者 新潟大学大学院 准教授　**田中　恒彦** 様



第２分科会（適応指導教室）の実践発表に先立ち，新潟大学の田中 恒彦先生から研究副題にかかわり，「連携」についてご講演いただきました。改めて不登校とは何なのか，私たちは不登校をどのように捉えておけばよいのかについてや，アセスメントの意義・支援シートの有効な活用の仕方，そして，連携をする上で，目的と方法をきちんと区別し，連携する目的を見失わないことの大切さなどについてご指導いただきました。

その後，適応指導部の実践について，具体的な事例を挙げながら，特に，児童生徒理解・教育支援シート（以下支援シート）を中核とした，再登校・社会的な自立に向けた支援及び学校連携の取組について発表しました。

今年度の副題にある，「子どもの自立につなげる確かな連携」を図るために，適応指導部では，上に示すとおり，大きく５つの柱立てをしました。この５つの柱を貫く手立てが，支援シートです。学校から送付いただく支援シートを基に，ぐみの木教室での様子を追記し，学校や関係機関との連携を行う際の最も重要なツールとして活用しています。支援シートは書くことが目的ではありません。支援シートに，本人に対する見立てや支援の方向性などの情報を「集約」し，「蓄積」していくことは，例えば関係機関からの問い合わせやケース会議等を行う際に，新たな資料等を作成することなく，すぐに活用することが可能となります。また，支援シートを活用することで，情報の「共有」を継続的に行うことができます。

今後も，本人に対するよりよい支援ができるよう，学校をはじめとした関係機関と連携を深めていければと思っています。

＜第３分科会・特別支援教育＞

指導者 新潟市教育委員会 学校支援課 総括指導主事　**関原　一成** 様

副題に「子どもの自立につなげる確かな支援」を掲げ，発達に障がいのある児童へ，放課後等デイサービス事業所，計画相談事業所，学校，保護者，当センターが連携した取組を発表いたしました。

当初，保護者は，学校での支援に不安を抱え，学校側も特別支援学級の様子を良くしたいと考えていました。両者の思いを受け，当センターは学校で行われる支援について指導助言を行いました。教室環境，教員の子どもへの対応の仕方が子どもの様子に応じたものになりました。そして，保護者のニーズでもあった福祉事業所参加の支援会議開催を実現することができました。複数回の支援会議を開催する中で，各所がもつ情報を共有する情報連携，有効な支援の共有，そして，現状を次の関係者へ引き渡し，その様子に応じた支援を行うという行動連携を実現することができました。支援が進む中で子どもの様子は落ち着いていきました。これは，福祉事業所と学校が互いの支援をリスペクトしながら連携した結果であると考えます。

関原 一成様からは，『新潟市の特別支援教育の現状と課題』をテーマにした講演に加え，本取組の講評をいただきました。個別の教育支援計画の作成運用を計画的に行うことの大切さ，関係機関が互いの支援の良さを認めながら，共通の支援と場に応じた異なる支援を行っていくことの大切さをご指導いただきました。

＜各区適応指導教室の活動紹介＞

参加者の方々の声

- 連携の大切さを改めて感じた。何のために連携するのかを具体的に示す必要があると思った。本人（個）と集団の成長のかかわりが一番共感しました。
- 教育相談だけではなく，学級経営や生徒指導にも生かせる内容でした。ありがとうございました。
- 佐藤亨先生のご講演の内容が，いままさにチーム学校で取り組んでいる事例が多くある中で見直していく視点をいただいたと思いました。“敬意”を忘れないようにしなくては，と思いました。特に本人を取りまく集団の育成は学校の生徒指導上の重点になっていて，力を入れていく大切さ，そして難しさを日々感じています。そのような中，佐藤先生のお話を頭の片隅において取組を続けていこうと思いました。ありがとうございます。
- 自校でも，支援会議等を行うための資料作りが担任の大きな負担になっていることがあります。最初から完璧な状態の資料（アセスメントシートなど）を用意しなければ，と気負いすぎず，今の見立てで作成し，メンバーの意見を取り入れながらより良いものを作り上げていけば良いと分かりました。
- 教育相談，適応指導教室について知ることができました。また，校内で情報共有する時「目的」「方法」について区別しながら進められたらと思います。いつも抽象的になっている理由が分かったような気がしました。
- 支援シートをどのように活用していくか，当校では担任と適応担当が記入，追記をし，そのままになっている。校内外での連携ツールとしていきたい。
- 支援シートの大切さを改めて感じました。また宿り木はいくつあっても良いという考え方で，学校にできることがもう少しあるのではないかと思いました。
- 問題の機能の分類について，行動には目的や意味があるという視点は，重要だと感じました。
- それぞれの立場や役割を尊重した連携が大切だと思った。
- 個別支援計画，指導計画の作成・利用についての重要性を改めて感じた。
- 担任一人で抱え込まずに，組織や関係機関と連携していくことが大切だと思った。

適応指導部の活動紹介

「心のエネルギー」をためる居場所になるように…

適応指導部主任　松島　慎一郎

適応指導部では，不登校状態にある子どもの学校復帰や社会的自立に向けた学習支援や体験活動，教育相談を行っています。主に東区，中央区，西区の子どもたちを受け入れている教育相談センター内の適応指導教室「ぐみの木教室」，北区の「さわやかルーム」，江南区の「そよ風ルーム」，秋葉区の「レインボールーム」，南区の「おおぞら教室」，そして，西蒲区の「スペースレスト」と，それぞれ５つの区にも適応指導教室が開設されています。また，今年度９月からは，ぐみの木教室の東区分室も開設されました。

センター内にある「ぐみの木教室」では，学習支援を目的とした「チャレンジタイム」を午前中に行い，午後は他者とかかわる力を育てる「コミュニケーションタイム」を行っています。「チャレンジタイム」では，子ども自身が取り組む課題や活動を「自己決定すること」を大切に支援しています。また，「コミュニケーションタイム」では，「人，もの，ことにかかわる活動」が多く計画され，造形活動，体育，かがく実験，外国語活動，外部講師から教えていただく万代太鼓，昔の遊び等が行われます。さらに，宿泊を伴う夏のチャレンジ・キャンプ，冬の作品展，お別れ会等の行事的活動も行っています。

今年度は，新型コロナウイルス感染症対策として，アクリル板の仕切りを使用したり，場面によってはフェイスシールドも活用したりして，３密を避けながら活動しています。調理や茶道といった例年実施している活動ができず，活動内容が制限されている部分もありますが，特に，コミュニケーションの大切さが失われないよう配慮しています。

- 館内フォトオリエンテーリングでは，チームに初めて会う人がいましたが，しっかり協力してゴールに向かうことができたので，とてもうれしい気持ちになれました。
- 不安なこともありましたが，自分なりに積極的に活動し，ふだんあまり話さない人とも短い会話でしたが話せて，とても楽しいキャンプでした。
- キャンドルファイヤーも，初めて見る景色にめっちゃ感動してずっと見ていて，とても心が落ち着いてよかったです。

上記は，今年度のチャレンジ・キャンプでの子どもたちの感想の一部です。

私たちは，こうした活動を通して，子どもや保護者，学校関係者の方の思いや悩み，ニーズに耳を傾け，連携を大切にしながら子どもの成長につながるよう支援・相談活動を行っています。子どもたちの学校復帰や社会的な自立に向けて，前に踏み出す「心のエネルギー」をためたり，ぐみの木教室が子どもたち自身の「居場所」になったりするよう，今後も適応指導部が一体となって支援・相談活動に努めていきます。

夜間「学習・進路相談室」からの声

夜間「学習・進路相談室」主任　金子　裕二

新潟市教育相談センターにある夜間「学習・進路相談室」は，学力不振と進路不安等で悩み，外出しにくい傾向にある不登校生徒（中学生）に，学習指導及び進路相談などを実施することで，生徒の自立と学力の向上や，学校生活への復帰・進路の達成を支援することを目的としています。

そのため，平常時は，水曜日以外の平日４日間，午後５時10分から８時までの時間帯に，学習指導や進路相談等を行っています。それぞれの生徒に個別指導を行っています。学習に関しては，一人一人の生徒の学力や，学習進度などに応じて，丁寧に，親身な指導をするように心掛けています。

また，進路に関する相談も，本人や保護者と適宜行い，将来に一歩踏み出すための支援を行っています。

12月に入り，多くの生徒が来室し，学習に励んでいます。初めは学習になかなかとりかかれなかった生徒も，今では自分から質問したり，自主的に家庭学習に取り組んだりするようになってきました。

学習する時間帯や，学習する場所など，限られた面もありますが，来室した生徒の皆さんにとっては，とても貴重な時間であることを肝に銘じて，微力ではありますが，できるだけの支援を続けていきたいと思います。

教えて，学ぶ

適応指導部 新潟万代太鼓
華龍 代表　田村　佑介

私の記憶によれば，太鼓指導のお話をいただき，早いもので10年が経とうとしております。「10年ひと昔」とは申しますが，当初不安ばかりであった中，私の持論である「まずは楽しく，そして何事も全力で取り組む」ということを心掛け，ここまで何とか務めて参りました。

振り返れば，指導から学ぶことが多かったこれまで，ある年のこと，本物の響きを感じてほしいと全力で太鼓を打ったところ，１人の生徒さんが耳を塞ぎ泣きながら外に飛び出していきました。大きな音が苦手な聴覚過敏の生徒さんであったと後から知ったのですが，そんなこともあり，演奏はもちろん太鼓に触れるのも無理だろうと，半ば諦めていました。しかし，初めは教室の外で授業を聞き，次第に入り口付近から教室の後ろ，遂には皆の輪に入り太鼓に触れ，音を楽しめるようになり，作品展では曲の要となって元気に演奏することができたのです。

以来，太鼓の音を出す時には声掛けをし，小さい音から始めること，そして指導者は絶対に諦めてはならないということを心に刻みました。

今年はコロナ禍の中での指導，残念ながら作品展も例年とは違う形での開催が決まり，「当たり前は当たり前ではない」ということに気付かされました。その中で私も，皆さんと心一つに和の精神をさらに深め，太鼓で培った気持ちを忘れずに，世の中に出られた時の一助となれば幸いです。